



長崎県農林技術開発センター



センターニュース

巻頭言

.....—1—

- スマート農業
- 表紙の写真

研究成果

.....—2—

- 長崎県における水稲高温耐性品種「なつほのか」の栽培適地マップ
- イチゴ「恋みのり」の花芽分化特性及び花房連続性
- イチゴ「ゆめのか」におけるハダニ類に対する炭酸ガス処理システムを用いたIPM防除体系
- 1~2月出荷作型トルコギキョウの環境制御(EOD-heating+CO₂施用等)による安定生産
- 加工原料の周年供給のためのピワ果肉の最適な凍結方法
- 中晩生カンキツ「津之望」の高糖度果実生産のための着果量
- 鶏舎における漆喰と廃材を用いた簡易なネズミ侵入防止対策の効果

研究紹介

.....—9—

- 機能性成分分析の高度迅速化による農産物における機能性表示食品商品化の加速

お知らせ

.....—10—

- 全国農業関係試験研究場所長会 研究功労者表彰受賞
- 優秀畜産技術者賞受賞
- 北諫早中学校、諫早農業高校の職場体験学習を受け入れました
- 九州沖縄マッチングフォーラムが開催されます
- ながさきアグリイノベーション研究開発プラットフォームに係る会員募集!!

温暖化に対応したモモ早生品種 「さくひめ」

巻頭言



農林技術開発センター
環境研究部門長

寺本 健

表紙の
写真

○スマート農業

「スマート農業」は、国の強力な推進もあり普及が急速に進められています。「スマート農業」とは、「ロボット技術や情報通信技術 (ICT) を活用して、省力化、精密化や高品質生産を実現する新たな農業」と定義されており、内容は、AI、ICT、IoT、ロボット、ドローンおよび各種技術を組み合わせた環境統合制御施設等多岐にわたっています。

「スマート農業」の活用により農作業の省力化、軽労化が図られ、さらには新規就農者確保や栽培技術継承等にも期待が持たれています。このため、「スマート農業」の普及は、日本の農業現場で課題となっている農業者の高齢化、労働人口不足 (減少) 等を解消できる可能性があり、今後の日本農業に不可欠な技術と思われます。

「スマート農業」に関して当センターでは、既に研究に着手している分野もありますが、今後も分野を広げ、取り組みを強化していく必要があります。しかし、「スマート農業」に関する企業は、大企業からベンチャー企業まで雨後の筍ごとく現れ、各社独自のしくみ等でその優位性を謳っているため、生産現場としてはその選択に苦慮している場面があります。

一方、「スマート農業」に取り組むと、すぐに目的とする結果、効果が得られるという風潮が感じられます。しかし、日本の「スマート農業」は始まったばかりで、その理論が先行し、効果の実証はこれから展開されるものが多いと思われます。たとえば、環境研究部門が担当する土壌肥料分野および病害虫分野では、①ドローンによるリモートセンシングで作物の生育の良し悪しは判るが、肥料との関係は未解明な部分が多い、②ドローンによる薬剤散布の防除効果は不明な作物が多い等々が挙げられます。さらに、「スマート農業」のデメリットとして、導入コストが高く、費用対効果が判りにくいということも言われています。

このように、「スマート農業」は解決すべき課題が多種多様残っている状況です。当センターは、長崎県の地形、栽培形態で利用できる「スマート農業」を開発するため、地道なデータの積み重ねおよび実証試験に取り組んでまいりますが、生産現場の皆様のご協力が必須ですので、今後ともよろしく願いいたします。

○温暖化に対応したモモ早生品種「さくひめ」

長崎県では温暖な気候を利用して施設モモ栽培を行っていますが、近年は温暖化の影響で安定生産に必要な低温遭遇時間が不足する年があり、ハウスピーニールの被覆時期の決定に苦慮しています。そのような中、主要品種「日川白鳳」と比較して低温要求時間が少なく、温暖化に対応した品種「さくひめ」が農研機構により育成されました。来歴は、ブラジル由来の低温要求時間の短い品種と、日本の果実品質に優れた早生品種「ちよひめ」、「あかつき」などとの交雑種です。

長崎県の施設栽培で「さくひめ」の樹体と果実特性を調査した結果、樹勢がやや強く、花芽の着生および花粉が多く結実は良好で、核割果の発生が少なく、果実重や果実品質ともに早生品種として良好でした。また、「日川白鳳」混植園において同時期に保温を開始した場合、「日川白鳳」より収穫期は「日川白鳳」より約4~5日早くなります。このように「さくひめ」は温暖化に対応した早生品種として有望であり、現地への普及が見込まれます。



長崎県における水稻高温耐性品種「なつほのか」の栽培適地マップ

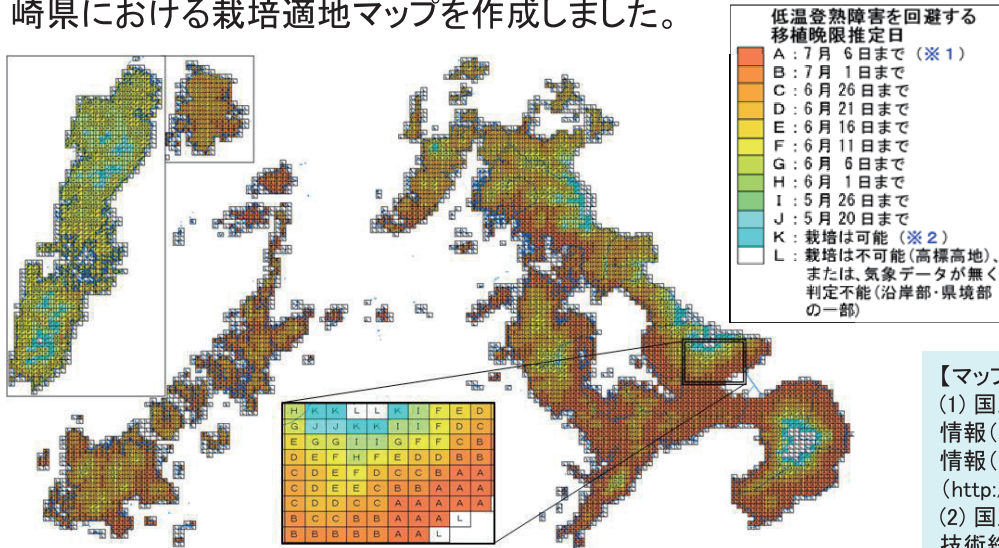
● 背景・ねらい

「にこまる」、「つや姫」に続き、高温耐性極良食味品種のひとつとして2016年に本県の奨励品種に採用された「なつほのか」の普及を図るため、長崎県における栽培適地マップを作成しました。

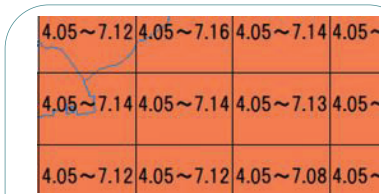
研究企画部門 研究企画室



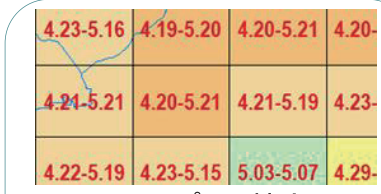
専門研究員 土井 謙児



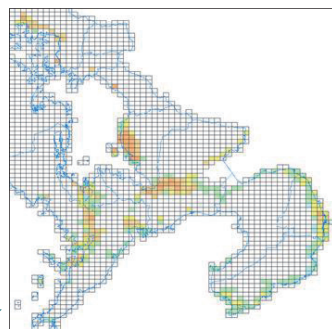
■ 図1 マップ1:「なつほのか」の栽培適地マップ(県全域)



■ 図2 マップ1の拡大図 (文字は好適移植期間)



■ 図4 マップ2の拡大図 (文字は「危険期間」)



危険期間の初日が 5月11日から
 危険期間の初日が 5月 6, 7, 8, 9, 10日のいずれから
 危険期間の初日が 5月 1, 2, 3, 4, 5日のいずれから
 危険期間の初日が 4月26, 27, 28, 29, 30日のいずれから
 危険期間の初日が 4月21, 22, 23, 24, 25日のいずれから
 危険期間の初日が 4月18, 19, 20日のいずれから
 白色 … 危険期間がないか、または
 気象データが無く判定不能 (海岸部・県境部の一部)

■ 図3 マップ2: 高温障害発生の可能性が高い「要注意地区」

- ※ 「要注意地区」は、県内で比較的気温が高い地区に見られ、この図の範囲外には存在していません。
- ※ 「危険期間」は、出穂後20日間の日平均気温の平均が29℃を超えるような高温に遭遇してしまう移植期間のこと(背白粒多発の恐れあり)。「要注意地区」では、「危険期間」の前と後に好適移植期間が分かれて存在しています。

● 研究成果

1kmメッシュごとの、水稻生育期間中の日平均気温と日長のデータを用いて作成した2種類のマップ(マップ1、マップ2)で「なつほのか」の栽培適地を示しました。

マップ1では、ある程度低温の年を想定して求めた好適移植期間の最終日を塗り分け(図1)、その拡大図(図2)には各メッシュの好適移植期間を文字で表示しています。マップ2では、高温障害発生の可能性が高い移植期間(「危険期間」)が存在する「要注意地区」を示すため「危険期間」の初日で塗り分け(図3)、その拡大図(図4)には各メッシュの「危険期間」を文字で表示しています。

なお、圃場単位など1kmメッシュよりも狭い範囲の好適移植期間を求める場合は、現地で実測した気温データと、本県が作成した「水稻生育シミュレーション2010」を使用してください。マップの入手・お問い合わせは、当研究室または各振興局まで。



イチゴ「恋みのり」の花芽分化特性及び花房連続性

● 背景・ねらい

長崎県のイチゴは、「さちのか」から多収性の「ゆめのか」へ転換が図られ、2018年には農協栽培面積の65%を占める主力品種となっています。一方で、2017年からは、九州沖縄農業研究センターで育成された「恋みのり」が、より省力的な栽培が可能な品種として試作導入されています。しかし、「恋みのり」は他県でも栽培事例が少なく、その栽培特性に不明な点が多いのが現状です。そこで、本県の栽培条件における「恋みのり」の花芽分化特性と花房の連続性について検討しました。

農産園芸研究部門 野菜研究室



主任研究員 前田 衡

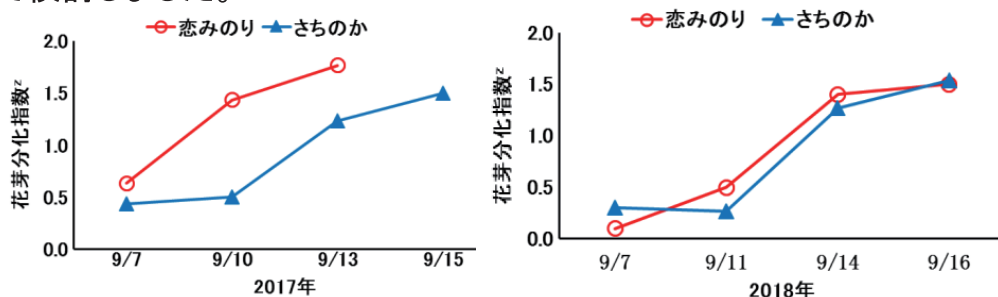


図1 頂花房の花芽分化の推移

z: 花芽分化指数: 0.0-未分化、0.5-肥厚初期、1.0-肥厚中期、1.5-肥厚後期(定植適期)、2.0-2分割期

表1 収穫開始日及び成熟日数、花房間葉数、1月までの収量、平均1果重

年次	品種	定植日 (月/日)	頂花房 開始日 (月/日)	頂花房 収穫開始日 (月/日)	頂花房 頂果 成熟日数 (日)	頂花房～ 第2花房 間葉数 (枚)	収量 11～1月 (kg/a)	平均1果重 11～1月 (g/果)
2017年	恋みのり	9/15	10/23±1 ^z	11/25±2	32.4	5.1	207(145) ^x	21.5
	さちのか	9/15	10/23±1	11/27±2	35.0	6.5	143(100)	15.1
	有意差 ^y				*	*	*	**
2018年	恋みのり	9/16	11/3±1	12/7±1	34.4	1.9	244(177)	23.4
	さちのか	9/16	11/2±1	12/11±2	39.1	5.7	138(100)	16.4
	有意差 ^y				**	**	*	*

z: 表中の±は95%信頼区間の幅

y: t検定により表中の*は5%水準、**は1%水準で有意差あり

x: ()内数字は同年の「さちのか」を100とした場合の比率(%)

● 研究成果

試験は、2017年と2018年の2年間実施し、「さちのか」を対照に花芽分化と花房の連続性に関わる項目を調査しました。その結果、頂花房の花芽分化は、「さちのか」と比べ同等か早い傾向となりました(図1)。また、同日定植の「さちのか」より成熟日数が短く、頂花房の収穫開始日は2～4日早いことが明らかになりました(表1)。更に「恋みのり」は、頂花房と第2花房の花房間葉数が少なく、1月までの収量と平均1果重が「さちのか」より重くなりました(表1)。

このことから、「恋みのり」は「さちのか」より花房の連続性があり、比較的単価の高い収穫期前半の収量が確保しやすい品種であると考えられます。



イチゴ「ゆめのか」におけるハダニ類に対する炭酸ガス処理システムを用いたIPM防除体系

● 背景・ねらい

本県の主要品種である「ゆめのか」は、ハダニ類が多発しやすい品種です。化学農薬による薬剤散布等で防除対策が行われていますが、被害が多く、問題となっています。本圃での多発生を抑えるには、苗による本圃への持ち込みを防ぐことが重要です。そこで定植前の苗を高濃度炭酸ガス処理(写真1)し、定植後の防除はミツバチと天敵に影響の少ない薬剤および天敵製剤を用いるハダニ類に対するIPM防除体系(表1)の開発に取り組みました。

環境研究部門
病害虫研究室



室長 難波 信行

☆高濃度炭酸ガス処理の概要

卵を含む各発育ステージのハダニ類に効果があります。処理条件は、濃度60%程度(大気中の約1500倍)、温度25~30℃程度(殺卵には25℃以上必須)で、時間24hrです。炭酸ガスは、農薬登録されているものを使用します。



写真1 処理風景

表1 ハダニ類に対する定植前の高濃度炭酸ガス処理を組んだ体系防除例

月	苗	本圃														
		9月			10月			11月			12月			1月		2月
	定植前	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	
処理	高濃度炭酸ガス			アフーム乳剤	マイトコーネフロアブル	スパイカルEX								コロマイト水和剤	スパイデックス	※スパイデックス

※臨機防除

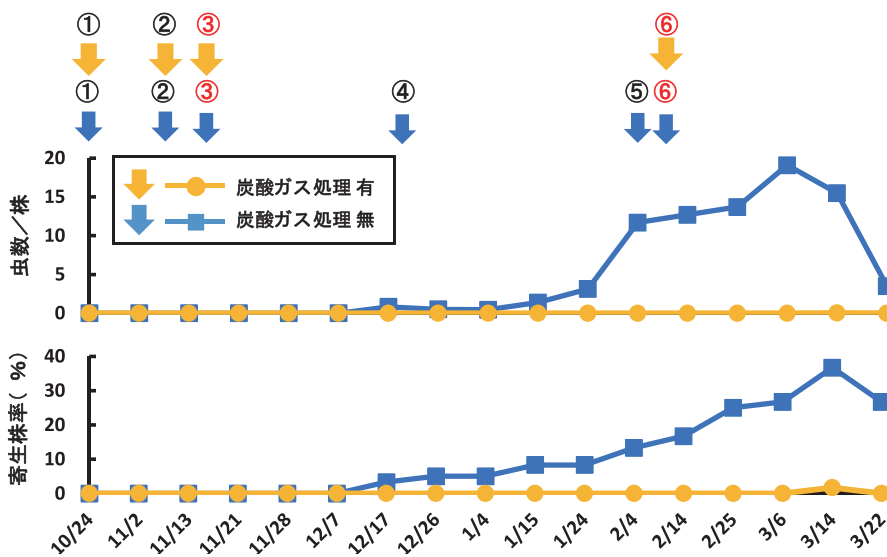


図1 ハダニ類に対する防除効果(2018年度)

品種:ゆめのか
作型:普通ポット(高設栽培)
炭酸ガス処理年月日:2018年9月24~25日
炭酸ガス処理システム:アグリクリーナー®
(株式会社アグリクリニック研究所)

定植:9月25日
農薬散布: 炭酸ガス処理 有 炭酸ガス処理 無
① アフームF ① アフームF
② マイトコーネF ② マイトコーネF
③ スパイカルEX ③ スパイカルEX
④ スターマイトF
⑤ ねん着くんL
⑥ スパイデックス

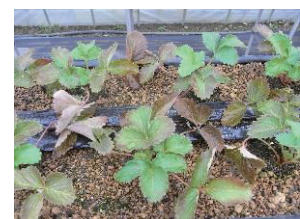


写真2 葉の褐変(処理6日後)

● 研究成果

本圃の防除に定植前の高濃度炭酸ガス処理を組み合わせることにより、ハダニ類の発生を長期間抑制し、慣行防除より防除回数が低減できました(図1)。なお、「ゆめのか」では、高濃度炭酸ガス処理を行った苗に、下葉が褐変する症状(写真2)が生じますが、収穫開始時期、収穫量に差はありません。

* 本成果は、革新的技術開発・緊急展開事業(うち地域戦略プロジェクト) 課題303C「生果実(いちご)の東南アジア・北米等への輸出を促進するための輸出相手国の残留農薬基準値に対応したIPM体系の開発ならびに現地実証」(平成28~30年度)によって得られたものです。

1～2月出荷作型トルコギキョウの環境制御(EOD-heating+CO₂施用等)による安定生産

●背景・ねらい

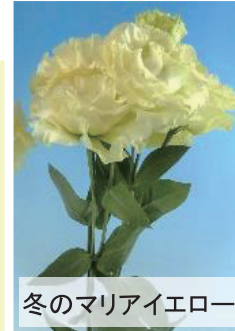
近年、花きにおいても光合成を効率的に行うための環境制御技術確立が試みられています。そこで本センターでは、1～2月出荷作型トルコギキョウにおいて、日没後4時間のEOD-heatingと高昼温管理、および炭酸ガス施用との組み合わせが品種‘冬のマリアイエロー’の開花特性に与える効果について明らかにしました。

農産園芸研究部門
花き・生物工学研究室



主任研究員 池森 恵子

【本試験における環境制御】



EOD-heatingと高昼温管理の効果

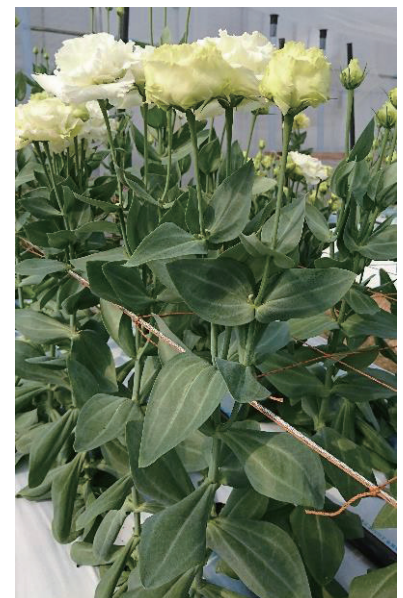
- ◎EOD-heating: 光合成産物の転流を促進し、夜間の呼吸抑制
- ◎高昼温管理: 日中にトルコギキョウの光合成適温(25～28℃)に保つ

■表1 ‘冬のマリアイエロー’の平均収穫日および切花品質

処理	平均収穫日 (月/日)	切花長 (cm)	切花重 (g)	節間長 ^z (cm)	分枝数 (本)	有効花蕾数 (個)	茎径 ^y (mm)	65cm 調整重 (g)	最大 花径 (cm)	最大 花首径 ^x (mm)
22℃/施用なし	1/29±6.2 ^w	70.3	97.3	3.1	2.7	5.9	6.7	77.4	9.7	4.7
28℃/施用あり	1/31±6.0	68.9	121.7	2.9	2.8	5.9	7.4	98.5	9.7	5.4

z) 主茎長/頂花節数 y) 頂花3節下の茎径 x) 花の付け根部分の径 w) 平均±S.D.

■写真 環境制御ハウスでの生育状況



■試験区の概要

試験区	22℃/施用なし	28℃/施用あり
炭酸ガス ^z 施用	なし	①11/20～12/27 8:30～16:00 ※1時間あたり15分施用 ②12/27～1/24 400ppm～500ppm設定 ③1/25～採花終了 500ppm～700ppm設定
温度 管理	日中	(換気設定温度 ^y) 22℃
	夜間	(換気設定温度) 28℃ (暖房設定温度)2区共通 16:00～20:00 18℃ 20:00～5:00 10℃ 5:00～7:00 12℃ 7:00～16:00 14℃ 【EOD-heating】

- z) 燃焼式炭酸ガス発生機(ネボン株) グロウエアCG-254S1を用いた局所施用
12/27以降の施用には制御盤(渡部パイプ株) ウルトラエースHを用いた濃度制御
y) 9/14～9/26は終日肩窓および側窓開放
9/27～10/15は側窓の換気温度を上記で設定し肩窓のみ終日開放
10/16～採花終了は上記温度で換気し、高温時のみ肩窓を開放

●研究成果

トルコギキョウの1～2月出荷作型において、EOD-heating下で日中高い換気温度(高昼温)で管理し、さらに炭酸ガス施用することで茎径や花首径が太くなり、切花重および65cm調製重が増加することがわかりました。

研究成果

加工原料の周年供給のためのビワ果肉の最適な凍結方法

● 背景・ねらい

研究企画部門 食品加工研究室

ビワは初夏の風物詩と言われる反面、流通する期間が非常に短く、長期貯蔵も困難なことから、消費の幅を広げにくい果物のひとつです。そこで、ビワの消費拡大を目的に、ビワの風味を活かした加工用原料を周年供給するため、氷点下に冷却したエタノールによるブライン凍結および通常の冷凍庫での凍結を比較し、最適な凍結方法を検討しました。



室長 稗園 直史

■表1 ビワ凍結果肉の解凍後の減量率(単位: %、品種: 茂木)

凍結方法	温度	貯蔵後日数				平均
		90日	180日	300日	360日	
ブライン	-30℃	13.7	11.9	13.1	12.1	12.7 c
	-20℃	15.4	11.6	16.0	13.6	14.1 c
通常	-40℃	21.5	23.8	21.8	18.1	21.3 b
	-20℃	33.2	24.6	28.4	26.2	28.1 a

注) 縦の異なる文字間にはTukey-Kramer検定の5%レベルで有意差あり。



■写真1 解凍後の「涼峰」果実(左:ブライン凍結(-30℃)、中:通常凍結(-40℃)、右:通常凍結(-20℃))

■表2 ビワ凍結果肉の解凍後の食味評価(貯蔵360日後)

凍結方法	温度	涼 峰	茂 木
ブライン	-30℃	中(-20℃より若干硬めでよい)	中(-20℃より若干硬めでよい)
	-20℃	中(やや弾力あり)	中(やや弾力あり)
通常	-40℃	不良(軟らかすぎ、歯応えなし)	不良(軟らかすぎ、歯応えなし)
	-20℃	不良(軟らかすぎ、歯応えなし、異味あり)	不良(軟らかすぎ、歯応えなし)

注) 食味は良、やや良、中、やや不良、不良の5段階で評価した。

● 研究成果

-30~-20℃のエタノール中で凍結したビワ果肉は、冷凍庫で凍結した果肉に比べて解凍後のドロップの発生が少なく減量率が低くなります(表1)。また、果肉の硬さが比較的保たれることから、冷凍庫で凍結した果肉に比べて本来の形状が保たれる(写真1)とともに、食味の低下も軽度です(表2)。

* 本成果は、革新的技術開発・緊急展開事業(うち先導プロジェクト)「国産果実の新たな需要を喚起する育種素材の創出および加工技術の開発」によって得られたものです。



中晩生カンキツ「津之望」の高糖度果実生産のための着果量

● 背景・ねらい

「津之望」は着果過多になると小玉果が多くなり、糖度は向上するが隔年結果を招きやすいため、2L程度の中玉生産を目標とした摘果指標を公表しています(ながさき普及技術情報第36号)。そこで、連年生産するための着果量の違いによる階級比率を明らかにしました。

果樹・茶研究部門
カンキツ研究室



研究員 園田 真一郎

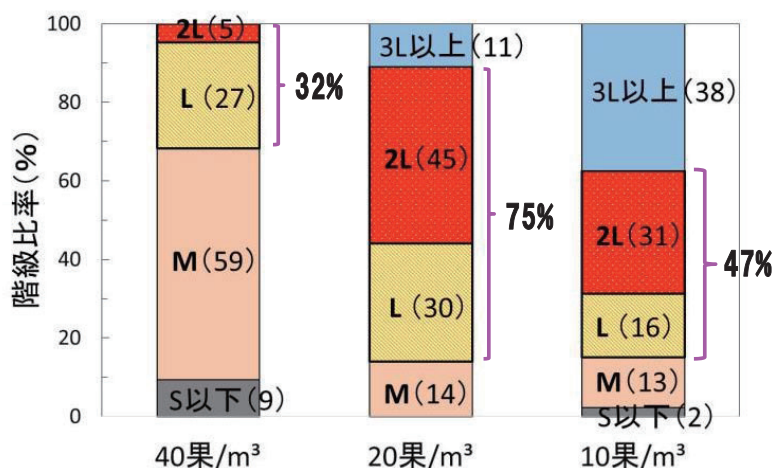


図1. 「津之望」の樹容積当たり着果量別の階級比率^z

^z 階級比率は温州みかん規格で区別

表1. 「津之望」の樹容積当たりの着果数と収量および果実品質^z

樹容積当たりの着果数	収量 (kg/m³)	果皮色 a* ^y	糖度 (Brix)	酸含量 (g/100ml)
40果/m³	4.4 a	32.3 a	14.1 a	0.77 a
20果/m³	3.4 ab	34.5 a	13.4 a	0.62 b
10果/m³	2.1 b	32.6 a	12.4 b	0.60 b

^z 異なる文字間はTukey-Kramer法による多重比較により5%有意水準で有意差あり

^y 正の値は果皮の赤みを表す



写真1. 「津之望」の着果状況

注1) 写真の着果量は20果/m³

注2) (写真の樹容積) = (樹高: 2.1(m)) × (樹冠長径: 2.3(m)) × (樹冠短径: 1.9(m)) × 0.7 ≒ 6.4(m³)

注3) 樹容積は7かけ法で算出

● 研究成果

摘果を6月下旬、7月中旬、8月上旬に、それぞれ時期別摘果割合を約30%に分けて行い、最終着果数を40果/m³区(31~50果/m³)、20果/m³区(17~25果/m³)、10果/m³区(11~14果/m³)としました。その結果、L~2L階級比率は着果数40果/m³で32%、20果/m³で75%、10果/m³で47%程度となりました(図1、写真1)。着果数20果/m³で収量は40果/m³よりやや少なくなりますが、糖度は13程度となり40果/m³と同等になりました(表1)。

以上のことから、20果/m³程度の着果量でL~2L階級中心となり、高糖度な果実を生産できることが明らかになりました。

* 本成果は、生研支援センター「革新的技術開発・緊急展開事業(うち地域戦略プロジェクト)『β-クリプトキサンチンの供給源となる国産カンキツの周年供給技術体系の実証』」の支援を受けて得られたものです。



鶏舎における漆喰と廃材を用いた簡易なネズミ侵入防止対策の効果

● 背景・ねらい

近年の養鶏業界は高病原性鳥インフルエンザ等の脅威に晒されています。鶏舎内へのネズミの侵入は、病原ウイルスが持ち込まれる原因のひとつともなっており、侵入防止対策として鶏舎の屋根や壁面等の侵入口となる隙間をなくすための修繕を実施する必要がありますが、コストや作業時間の面で十分な対策を実施できない場合があります。

そこで、漆喰や廃材を用いたネズミ侵入防止対策を実施し、その効果について明らかにしました。

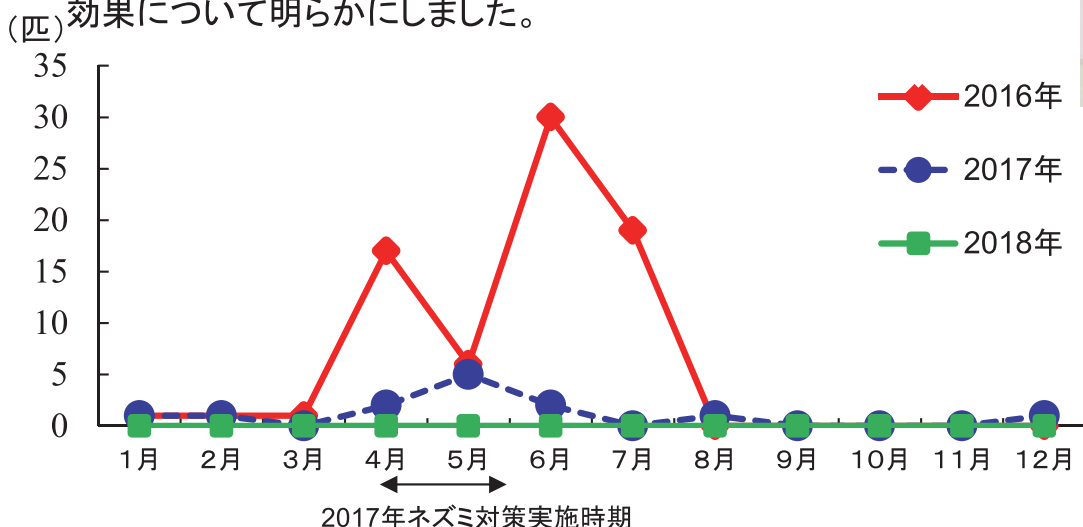


図1. セミウインドレス鶏舎における年別のネズミ捕獲数推移

表1. ネズミ侵入防止対策にかかるコスト試算

鶏舎	鶏舎面積 (m ²)	作業時間 (時間) ¹⁾	労務費 (円/日) ²⁾	材料費 (円) ³⁾	計 (円)
セミウインドレス舎(1000羽規模)	144	6.85	5,309	3,430	8,739

1)作業は1人で行うものとして算出

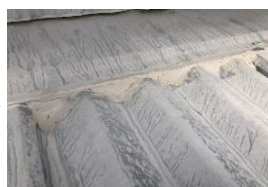
2)長崎県労務費(軽作業:6200円/日)より

3)材料費は漆喰の購入費用

セミウインドレス鶏舎の屋根と壁面の隙間を埋めるウレタンの破損がネズミの侵入経路となります。



漆喰塗装前



漆喰塗装後

写真1. 漆喰を用いたネズミ侵入防止対策

天井の隙間対策は廃材(トタン製の古いチックガード等)を成型してネジで固定しました。



トタン製のチックガード



チックガードの取り付け

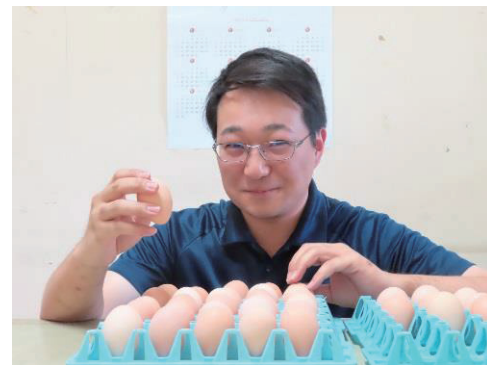
写真2. 廃材を用いたネズミ侵入防止対策

● 研究成果

漆喰と廃材を用いた簡易なネズミ侵入防止対策をすることで、鶏舎内のネズミの捕獲数は減少しました(図1、写真1、写真2)。

また、セミウインドレス鶏舎(144m²)では1人作業の労働時間は7時間程度となり、9,000円程度の低コストで行うことができました(表1)。

畜産研究部門
中小家畜・環境研究室



研究員 松永 将伍

低コスト

機能性成分分析の高度迅速化による農産物における機能性表示食品商品化の加速 <ミカン混合発酵茶の開発と機能性表示食品商品化> (研究企画部門 食品加工研究室)

● 背景・ねらい

摘果ミカン(青ミカン)は血流改善などの機能を有するヘスペリジン豊富に含んでいます。しかし、ヘスペリジンは水に溶けにくく体内への吸収性が低いことから、ヘスペリジンを含む食品を単に摂取するだけではヘスペリジンの有する機能が発揮されにくいのが難点です。ヘスペリジンの水溶性と生体内への吸収性を飛躍的に高める新たな方法として青ミカンと茶葉を強く揉み込み乾燥させる(ミカン混合発酵茶)製造方法を開発しました。本成果を踏まえ、ミカン混合発酵茶の製造技術移転を図るとともに、ヒト介入試験(臨床試験)を行い、研究期間終了後1年以内に機能性表示食品として届出を行い商品化を目指します。併せて、食品卸業と健康食品企業が参画することで生産から商品化までの効率的なサプライチェーン、バリューチェーンの構築を図り、生産者の所得向上と国民の健康増進を図ります。

青ミカンは機能性を有するヘスペリジンを多量に含有

ヘスペリジンは水に難溶性
生体内での吸収性が低い

揉捻加工

青ミカンと茶生葉(1:3)の揉捻加工技術によりヘスペリジンの水溶性向上と生体内吸収性向上を実現

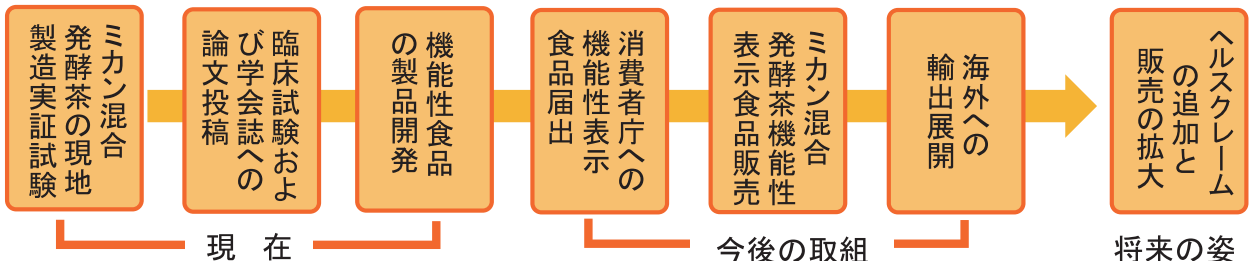
ミカン混合発酵茶

● 研究概要

共同研究機関：宮崎県総合農業試験場[中核機関]、長崎県農林技術開発センター、長崎県立大学、アリメント工業(株)、(株)サンダイ、(株)長崎ワンダーリーフ

<h4>1 大型製茶工場での製造実証と品質安定性試験</h4> <p>選果・洗浄試験</p> <p>製造技術講習会</p> <p>ミカン混合発酵茶の提供</p> <p>[長崎県農林技術開発センター、(株)長崎ワンダーリーフ]</p>	<h4>2 ヒトでの有効性試験(臨床試験)</h4> <p>長崎県治験ネットワークによる冷え・肩のこり・疲労感・睡眠の質の改善試験</p> <p>[長崎県立大学] 皮膚温調査, 主観的調査</p>
<h4>3 機能性食品の開発と表示食品制度への届出</h4> <p>機能性表示食品を前提とした商品設計と素材の検討</p> <p>[アリメント工業(株)]</p>	<h4>4 サプライチェーンバリューチェーンの構築とマニュアルの作成</h4> <p>生産から製造、販売までのサプライ・バリューチェーンを構築する品質保証マニュアルを整備する。</p> <p>[(株)サンダイ]</p>

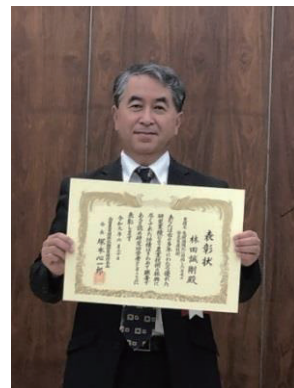
目指す姿



全国農業関係試験研究場所長会 研究功労者表彰受賞！！

研究企画部門研究企画室の林田誠副主任研究員が、令和元年6月20日に東京都で行われた全国農業関係試験研究場所長会において、研究功労者表彰を受賞しました。

気候温暖化に対応したモモの安定生産技術に関する業績として、モモの休眠に必要な低温要求量の算出、休眠覚醒時期を推定するソフトウェアの開発、さらには、暖冬条件化でも正常な開花を確保する栽培手法等を確立し、県内の栽培技術マニュアル等で広く活用されていることが評価されました。



第53回優秀畜産技術者賞受賞！！

畜産研究部門中小家畜・環境研究室の深川 聡室長が、令和元年6月18日に東京都で行われた第53回優秀畜産技術者表彰において、優秀畜産技術者賞を受賞しました。

矮性ネピアグラスは越年利用可能で、栄養価や牛の嗜好性が高いことを明らかにし、冬季に茎を移植する簡易草地造成法を確立したほか、飼料イネサイレージのTDN含量について、簡易推定法や乾物消化率および粗灰分含量から精度よく推定できる手法を開発し、マニュアル等で広く周知されていることが評価されました。



北諫早中学校、諫早農業高校の職場体験学習を受け入れました

令和元年7月2～4日に北諫早中学校（5名）及び7月23～25日に諫早農業高校（4名）の職場体験学習を受け入れました。

食品加工、農産園芸、環境、森林の各研究部門での研修を行い、農業の研究に関する知見を広めるとともに、将来の進路について考える良い機会を得たとの声をいただきました。



九州沖縄マッチングフォーラムが開催されます

農林水産省、農研機構九州沖縄農業研究センター、九州農業試験研究協議会では、毎年、九州沖縄地域マッチングフォーラムを開催しており、本年は8月28日に長崎市で開催されます。

このフォーラムは、農業の生産現場のニーズを踏まえた研究の推進と研究成果の迅速な普及を促進するため、生産者、農業団体、行政・普及、企業、大学や公設試の研究者が双方向の意見・情報交換を行う目的で開催されるものです。ご都合が付けば、ぜひご参加ください。参加は無料です。参加申込など詳細は農研機構九州沖縄農業研究センターのホームページをご覧ください。

1. 日時 令和元年8月28日(木)10:00～16:30(受付9:30～)

2. 場所 長崎大学環境科学部(長崎市文教町1-14)

3. 内容

●第1部 加速するスマート農業の展開

①温州みかんの生産から出荷をデータ駆動でつなぐスマート農業技術一環体系の実証

②九州北部2年4作(稲・麦・大豆・麦)大規模水田スマート一環体系の実証

③多様な人材が集う農業法人経営による全員参加型のスマート農業技術体系(大規模露地野菜複合経営の実証)

④IoT技術・ロボット化技術を活用した大規模スマート茶業一環体系の実証

●ポスターによる研究成果紹介と技術相談

●第2部 技術と品種を活用した地方創生

①ビワ葉と茶葉を混合発酵させた高機能発酵茶の開発

②九州向けもち性大麦品種「くすもち二条」の開発と普及

ながさきアグリイノベーション研究開発プラットフォームに係る会員募集！

農林技術開発センターは、本県の農林業振興に寄与するイノベーション研究を推進するために、「ながさきアグリイノベーション研究開発プラットフォーム」を運営しています。

本プラットフォームは、農業に異分野の知識・技術等を導入することで、ICT等を活用した革新技術を創出し、省力化による規模拡大や品質向上により農業者の所得向上を目指す「ながさきアグリイノベーション技術実証事業」の一環としての取組です。プラットフォームにおいては、参画いただく民間企業や大学、独立行政法人などの構成員がお持ちの研究シーズやニーズを基にマッチングする機会を提供し、新しい研究開発の枠組みづくりを進めます。

また、メールマガジンなどにより農林技術開発センターで開発している研究や農業に関する情報を提供します。

プラットフォームに係る会費(入会費含む)は無料です。参画希望の方は、下記URLを参照いただくか、下記連絡先までお気軽にお問い合わせください。

事務局：長崎県農林技術開発センター研究企画部門 研究企画室

担当：嶋澤光一、林田誠剛 TEL：0957-26-3330

E-mail：k.shimazawa@pref.nagasaki.lg.jp

URL：https://www.pref.nagasaki.jp/e-nourin/nougi/pdf/2018agri.pdf



発行  長崎県農林技術開発センター

〒854-0063 長崎県諫早市貝津町3118番地 TEL 0957-26-3330

<https://www.pref.nagasaki.jp/e-nourin/nougi/>